

Title	A CORPUS ANALYSIS OF ARGUMENTATIVE WRITING : AUTHORITY AND INTERTEXTUALITY IN THE BRITISH NEWSPAPER EDITORIALS
Author(s)	三木, 望
Citation	
Issue Date	
oaire:version	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59142
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について こちら をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	三 木 望 ^{のぞみ}
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 4 8 4 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化専攻
学 位 論 文 名	A CORPUS ANALYSIS OF ARGUMENTATIVE WRITING: AUTHORITY AND INTERTEXTUALITY IN THE BRITISH NEWSPAPER EDITORIALS (議 論 文 の コ ー バ ス 分 析 : 英 国 の 新 聞 社 説 の Authority と Intertextuality を巡って)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 渡 部 眞 一 郎 (副査) 教 授 林 良 彦 教 授 岩 根 久

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、談話で重要であるだけでなく、読者と対峙する場を書き手に提供する主語及び述語の組み合わせを中心にコーパスの分析で要約して、議論文の特徴とバリエーションをライティングの学習者やアカデミック・ライティング、社会言語学の研究者に示唆することである。そして、帰納的に分析した結果から判明した特徴の「書き手の現れ (authority)」と「テキスト外の参照 (intertextuality)」が議論文にとってどのような意義があるのか述べる。Authority と intertextuality が、先行研究で主張されているものの、まだ量的に実証されていなかった議論文の下位分類 (情意的な文体の Hortatory Exposition と理性的な文体の Analytical Exposition) とそれぞれ関係していることを主張する。そして、これらで英国高級紙4紙の社説を分類して、実際の議論文の有り様を指摘する。

議論文は、社説、アカデミック・ライティング、英語能力技能試験のライティング・テストで、幅広く使用されるレジスターである。その一方で、学習者や未熟な書き手にとって、記述文、物語文などの他のレジスターと比べて最も書くことが難しいと言われ、特に議論文の主語名詞句の選択や書き手の表出の書き方が難しいという報告がある (Cadman, 1997; Baynham, 1999; Hyland, 2001, 2002; Ivanić, 1994, 1998; Tang and John, 1999)。そのため、書き手の表出及び主語名詞の使用傾向を含む実際の議論文の特徴を解明することには意義がある。議論文の模範と言われる社説は、同じジャンル (社説) の中でも特に主語を中心にバリエーションがあることが先行研究でしばしば指摘されてきたが、先行研究が扱っていたデータのサイズに問題があるため、バリエーションの解明が十分ではない。議論文の量的分析 (Biber, 1988; Westin, 2002) は多数の言語素性を幅広く扱っているが、先行研究の言語素性の検証を十分に行わないで、そのまま踏襲して分析で使用しているため、個々の言語素性自体の意義が明確でない。特定の言語特徴を演繹的に分析する方法 (Corpus-based analysis) と対照的に、このような仮説を証明するために議論文のデータから帰納的に言語事実を発見するコーパス駆動型 (Corpus-driven analysis) の分析は、議論文の研究では意外と少ない。そこで、議論文の模範と称されている社説を、一部、演繹的方法も加味しつつ、コーパス駆動型で議論文の特徴とバリエーションを分析した。データは、英国高級紙4紙 (*The Times*, *The Guardian*, *The Daily Telegraph*, *The Independent*) から最近6年間の記事をそれぞれ収集して4つの社説コーパスを作成した (各コーパスでテキスト数 3,300本から約40,000本、約200万語から約150万語、全体で計約750万語)。

研究方法として、Keyword Analysis の手法を応用した Key Colligation Analysis を考案して、語単位ではなく句単位で主語という抽象的な文法機能を担っている組み合わせ (colligation) を扱えるようにした。こうした colligation は生起位置を問わない語の連鎖である collocation と区別される (Firth, 1957; Hoey, 2005; Hunston,

2001)。分析では、最初に4つの社説コーパスを Machine Syntax という統語解析器で文法標識を付与して、主語と動詞、助動詞、能動態・受動態から可能な数種の colligation を頻度と共に抽出するプログラミングのスク립トを作成した。そして、対象コーパスと参照コーパスにおける 各colligation の頻度の尤度比検定を行い、有意差 ($P < .001$) を示した colligation のみを分析対象とした。Key Colligation Analysis のあとは、colligation を特徴別に分類して、コンコーダンス分析、及びパラグラフの生起位置、周辺の談話標識や談話構造を考慮しながら質的分析を行った。また、主語の意味的特徴を客観的に分類するために、類義語集合のデータベースである WordNet を使用した。

以上の分析より、英国社説が新聞社によって人間と無生物の colligation について異なる傾向を示すこと、Hortatory Exposition と Analytical Exposition に分類されることがわかった。*The Daily Telegraph* と *The Independent* が他の *The Guardian* と *The Times* よりも一人称代名詞複数形の量、及び we-colligation の個数が多く、書き手の存在感を表す authority が高かった。分析では we の解釈について共起する動詞、助動詞、時制・アスペクト、生起位置、副詞句によって一定の傾向が確認できた。例えば、思考動詞を含む we hope は現在時制で最後のパラグラフに生起すると、読者を指示対象としない排他的な解釈が優勢であった。他にも、様態副詞 (e. g., earnestly) をテキストに入れることによって見解のバランスを計りつつ、議論を活性化している点で、英国高級紙の中で最も Analytical Exposition と言える。*The Independent* は、一人称代名詞の使用によって現れてくる Hortatory Exposition の特徴を示しつつ、非人称構文、受動態、ラベル名詞を使うことによって、authority を抑制したレトリックも目立ち、Hortatory Exposition と Analytical Exposition の中間に位置していた。

Authority/intertextuality と Hortatory/Analytical Exposition の関係についてまとめる。Authority と intertextuality は、コーパス駆動型で議論文を分析した結果、現れてきた特徴であって、we が intertextuality として使用されていたように、authority と intertextuality は排他的な関係ではない。一方、Hortatory Exposition と Analytical Exposition は、Martin (1985a) がまとめたライティングにおける対照的な特徴である。Hortatory Exposition が人や情意的な文体と定義されているので、authority の特徴と重なる。Intertextuality は、外部から当該のテキストに情報を取り込む操作なので、情報に基づく論理的展開が特徴の Analytical Exposition と結びつく。但し、実際のプロの書き手による議論文 (社説) では、一人称代名詞の包括的解釈を利用して書き手が強調したい情報の中へ読者を巻き込み、authority と intertextuality が混在していた。まとめると、Hortatory Exposition が主な特徴の社説でも authority だけでなく、intertextuality もレトリックとして使用されていたことがわかった。

本研究の主要な貢献は以下の通り4つある。一つは、議論文で一人称代名詞が排他的・包括的解釈を持つ場合のパターンを調べ、特に包括的解釈は単に authority だけでなく、読者を巻き込んで情報を共有する intertextuality でもあることを、パターンを示しながら指摘したことである。二つ目は、従来の Keyword Analysis が語単位であるのに対して、Key Colligation Analysis は句単位で、主語を中心に動詞、助動詞、受動態から構成される実際の生起の形をできるだけ維持しながら要約したことである。三つ目は、先行研究で指摘されてきたが、大量のデータを使った検証が行われていなかった Hortatory Exposition と Analytical Exposition の実際と議論文のバリエーションが分かったことである。四つ目は、英国高級紙社説のサブ・ジャンルがわかったことである。

研究の価値・意義としては、同じく4つある。第一に、authority の研究は社会言語学だけでなく、大学の講義やアカデミック・ライティング、L2ライティングの研究でも取り上げられているが、横断的研究が少ないので、本研究の we の包括的解釈の認知的説明には意義がある。第二に、コーパスで幅広く慣行されている Keyword Analysis に代わる方法として、Key Colligation Analysis で実際のデータの特徴付けを実証したことには意義がある。第三として、実際の議論文の有り様を教育に活かすために議論文が2分割されるのではなく、段階的な違いであるという事実を指摘したことは、注目に値する。アカデミック・ライティングが分野ごとに、特に理系と文系の論文の書き方が異なるように、その他の議論文のバリエーションの存在を認識することは、初心者学習者には重要である。第四に、英語圏の新聞は言語現象を調べる際の貴重なデータなので、英国高級紙社説のサブ・ジャンルの存在を指摘しておくことは重要である。

今後の課題は、主に3つある。主語名詞だけでなく、文頭の要素 (副詞句、前置詞句) の主題を併せて分析すれば、談話標識の体系的なパターンが把握できるので、研究価値があるだろう。次に、アカデミック・ライティングの主語と述語を同じ手法で分析することによって、分野ごとの違いが明らかになるだろう。これまで主語の語彙名詞の量的研究はあるが、本研究のように受動態と助動詞が対象に入っていなかったので、研究の余地がある。最後は、社会言語学への応用である。高級紙とタブロイド新聞の比較研究は社会言語学でよく取り上げられるテーマだが、社説の比較はないので、研究価値がある。

本論文は、英国高級紙4紙（*The Times*, *The Guardian*, *The Daily Telegraph*, *The Independent*）の最近6年間の社説（議論文）を収集した全体で計約750万語の社説コーパスを作成して、これを対象にして構文解析を施した結果に基づき4紙の社説議論文の特徴を抽出している。従来の研究対象が語単位に基づく分析であることが多かったのに対して、本論文では、主語と述語の組み合わせを自作プログラムによって抽出することにより、句レベルの組み合わせの分析を行い、4紙の社説議論文の特徴を多角的に分析している。

本論文は9章から構成される。第1章では、本研究の目的と構成および研究の基盤となる概念の枠組み（Averral, Authority, Intertextuality, Hortatory/Analytical）について論じている。第2章では、先行研究に関する考察でその良い点と問題点を明確にして、本研究のめざすところを明示している。第3章では、研究対象となる独自に編纂したコーパスの構成について論じ、第4章では、社説テキストのタグづけの仕方、そのタグづけされたコーパスによる句単位分析のための方法論を中心に論じている。第5章より本論文の主語と述語の動詞、助動詞の組み合わせを単位とする様々な分析結果が示されている。まず、第一人称複数形 *we* の英国4紙での使われ方の違いについて、*we* と共起する動詞、助動詞、時制、アスペクト、副詞句との組み合わせ方が4紙で異なる点に注目して、その違いの特徴を抽出している。第6章では、*it*, *this*, *that* の代名詞をはじめとする無生物主語と述語との組み合わせを詳細に分析している。第7章では、主語と述語の組み合わせに見られた英国4紙それぞれの特徴が、他の言語表現形式についても見られることを示すために、引用と伝達動詞の組み合わせ、否定表現、疑問表現、縮約形の種類と頻度等のさまざまな表現形式を取り上げ論じている。第8章では、本論文の分析結果を全体的な概念枠組みでの位置づけを示すことにより総括を行い、最終章では、本論文が依拠する概念の枠組みについての意義、問題点等について論じている。

本論文は、メディア研究、コーパス言語学の先行研究を視野に置きつつその不備を補い、処理方法を吟味した上で、英国4紙の社説データを基に三木氏が独自に構築した大規模な新聞記事コーパスを対象として、数多くの言語表現形式に基づいて、明快な形で4紙の特色・特徴が抽出できたことは高く評価できる。とりわけ、単なるキーワードや連語ではなく、構文解析プログラムを適用することにより得た句レベルを分析の単位としたことにより新しい発見を得ることができたことは評価できる。ただし、論文全体の均整と簡潔性という面から言えば、冗漫な部分に対する十分な彫琢がなされていなかったことは残念であり、本論文の依拠する概念の枠組みについてもまだ検討する余地が残されている。しかしながら、これらの改善点の存在は決して本論文の価値を損なうものではなく、本論文の研究成果は高く評価できるものである。

以上により、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。